

# 『宮本常一 回帰の旅』



民俗学者・宮本常一は自分の脚で日本中を歩き、戦前から戦後にかけてあらゆる農村漁村を、そして辺鄙な山間地や離島を旅した人だった。そこで出会った庶民の暮らしぶりを、つぶさに見聞きし記録した。民俗学者としての仕事ならここで終わるところだが、彼は苦しい生活を送る人の多いのを見て、どうしたら人々の助けになることができるか考えた。旅先で出会った人が困っていたら、各地を旅する間に蓄えられた見識から助言をすることもあった。また、定期的に訪れる地域の若者を集めては、郷土を知るための学習会を開くこともあった。

その宮本は晩年、生まれ故郷の周防大島に戻り、島の若者を集め「周防大島郷土大学」を開いた。「郷土を理解するとともに、郷土から広い社会全般の事象を理解し、いかに生きてゆくべきかの方向を見出すため、より高い教養を身につけ、その成果を郷土で実践してゆくこと」を、その目的と掲げた。

ある寺の住職は、この大学に参加し始めた当時、島の寺を継いでゆく自分の将来を悲観的にみていたと話してくれた。自分は本来、寺を継ぐ立場ではなく、京都の大学に通い将来の希望も持っていた。それが突然、跡継ぎをするはずだった者がいなくなつたために、泣く泣く島に引き戻された。そんな日々を送る中で、郷土大学に参加するようになった。講義の中で、宮本先生は島にあるすべての寺社仏閣について、いつ誰が創建し、どんな由来を持つか、そして何という大工が建てたかまで詳しく説明してくれた。そうするうちに、自分はそれらのものが真に価値あるものと感じ始め、島を誇りに思うようになったのだ。と、語ってくれたのが印象的だった。

その郷土大学は現在も続けられている。宮本の膨大な著書から一冊ずつ拾い上げ読書会をしたり、年数回、講師を招いての講義も開かれている。十年前に大々的に催された「宮本常一 生誕百周年記念」を始まりに、以来、気になる講義があれば島を訪れるようになった。この夏、生誕百周年記念のイベントに合わせて四回目となる周防大島への旅をした。

四回目ともなれば、郷土大学の面々とも顔馴染みになる。事務局を務める人は、周防大島から更に橋を渡つてゆく小さな島で、民宿を営んでいる。島を訪ねる時は、いつもここで世話になる。「買い出しのついでに駅まで迎えにゆくよ」の声に便乗させてもらった。宿への途中、海なし県から出てきた者にとっては見過すことなどできず、海水浴場で途中下車をする。夕方までたっぷり遊んで、宿まではバスに乗った。宿に入るときは「ごめんどさい」ではなく、「たたいま」である。

今回の百周年記念には、シンガーソングライターの寺尾紗穂と民俗学者の赤坂憲雄の対談が組まれていた。もちろん寺尾紗穂のコンサートも。

彼女がコンサートの中で曲を紹介する時に、「友達の近親者が自殺してしまつた。社会の中で孤立していたのだと思う。そんな人たちのために自分は何ができるのだろうかと考えている」と語り、歌つた。そして翌日の赤坂憲雄との対談の中で、「宮本さんの本には、共同飲食する風習が出てくる。一緒に同じものを食べることで人と人をつないでいる。孤独の中で亡くなる人がいる現代において、大きなヒントだと思ふ」と語っていた。

宮本常一の教えを継承する民俗学者たちにしても郷土大学を引っぱってきた中心メンバーにしても、六〇代七〇代が多くなってきた。後継者はいるのだろうかと思念していたが、三〇代の若い寺尾の言葉に、宮本の精神の引き継がれることを見る思いだつた。宮本の名著『忘れられた日本人』には、庶民の暮らしぶりや風習、生きるための知恵が語られているが、その奥に庶民を見つめる宮本のあたたかい眼差しが感じられる。それと同質のあたたかさを寺尾の言葉に、歌に感じたのだつた。

郷土大学出身者が主になって作る「周防大島観光ボランティアの会」というのがある。ガソリン程度の謝礼で、宮本ゆかりの場所を島中案内してもらつたことがある。そのボランティアの会が編集した『宮本常一とあはれ』というガイドブックをいただいた。巻頭にまず、宮本の言葉を引用している。

人はそれぞれの環境の中で、それぞれ自分の生きる場をつくつてきている。その努力と英知に頭の下がるものがある。自分一人が住むのではなく、子孫を長くそこに住まわせるだけの世界をつくりあげていっている。そこに文化がある。

そして最後にまた、宮本の言葉でしめくくっている。  
それぞれの地方の文化はそこに住んでいるものが守らねば守りようのないものである。それが守られることよって新しい文化を迎え入れる力を生ずるのが真の文化的発展ではなからうかと考える。文化の導入がふるさと喪失への道につながるものであつてはならないと思ふ。

自分の探していた答えや、それに近づくヒントに出合つたような気がした。宮本の書き残したものの中には、現在の私たちが直面する問題や社会の病巣を解くヒントがたくさん書かれている。シンガーの寺尾が見つけ出したヒントのように、時折繰り返しひもとく本の中には、人の世界に本当は存在するはずのあたたかいつながりを思い出させてくれるものがある。迷つた時に、自分の立つべき位置を教えてくれるものがある。

島を訪れるたびに感じるのは、故郷に戻つたような安心感、遠く離れてめつたに会えなくても友達がいるというよさ。これも宮本常一が残してくれた人と人のつながりなのだと思う。島から新たにつながりは広がってゆき、これもまた彼の恩恵のひとつなのだと思う。